

日本聖公会 管区事務所だより

日本聖公会管区事務所
162-0805 東京都新宿区矢来町 65
電話 03 (5228) 3171 FAX 03 (5228) 3175
発行者 総主事 司祭 相澤 牧人



日本聖公会発祥の地 長崎、 原爆の爆心地で祈るカンタベリー大主教

九州教区主教 ガブリエル 五十嵐 正司

ローワン・ウィリアムズ・カンタベリー大主教は来日を決意してから、原爆投下の地に立ちたいと願っていると聞きました。日本聖公会としてはチャニング・ムーア・ウィリアムズ宣教師が長崎に上陸してから今年150年を祝うこととなりますので、是非に長崎に立っていただきたいと願い、今回の長崎訪問が決定いたしました。

東京カテドラル聖マリア大聖堂での150周年礼拝の翌日、昼前に長崎に到着されました。英国からの同行者であるジョアン秘書官、マリイ広報担当、T.ステューブンス主教、グレゴリーよしみ氏、および植松首座主教、植田主教（150周年担当主教）夫妻が同行されました。

カトリック長崎大司教区高見大司教のご好意により公用車が長崎空港まで迎えに来ていただきました。カンタベリー大主教の長崎訪問に際しては、高見大司教も歓迎と協力を惜しまず、爆心地での礼拝にもカトリックの方々が共に祈り、平和を願い核兵器廃絶を願う祈りを共にいたしました。

はじめに長崎原爆資料館を訪ね、玄関で館長に迎えられ、

□会議・プログラム等予定

(前回報告以降追加)
および11月5日以降)

10月

- 8日(木) 管区共通聖職試験委員会〔15日に変更〕
- 9日(金) 日本聖公会宣教150周年記念礼拝実行委員会
- 13日(火) TOPIK会議
- 15日(木) 管区共通聖職試験委員会
- 26日(月)～27日(火) ハラスメント防止のための教材作り作業会
- 27日(火) TOPIK会議
- 31日(土) 正義と平和・ジェンダープロジェクト(京都教区センター)

<以上前回報告以降追加分>

11月

- 5日(木) 年金委員会
- 11日(水) 教役者遣児教育基金・建築金融資金運営委員会
- 13日(金) 財政主査会
- 13日(金)～14日(土) 日本聖公会資料保管に関する全国協議会(滝乃川学園)
- 17日(火) ウィリアムズ主教記念基金運営委「選考小委員会」(立教大学)取り止め
- 18日(水) 主事会議
- 18日(水) 日本聖公会宣教150周年記念プログラム実行委員会
- 24日(火) 礼拝委員会
- 25日(水) 常議員会
- 30日(月)～12月1日(火) 文書保管委員会

12月

- 1日(火) 年金維持資金管理委員会
 - 4日(金) ウィリアムズ主教記念基金運営委員会(立教大学)
 - 7日(月) 正義と平和委員会
 - 7日(月) 青年委員会
 - 12日(土) 各教区財政担当者連絡協議会(牛込聖公会聖バルナバ教会)
 - 14日(月) 主事会議
- <関係諸団体会議等>
11月20日(金) NCC常任常議員会

(次頁へ続く)

詳しく説明がありました。その後、爆心地に向かう途中、朝鮮人原爆犠牲者の碑に献花し、祈っていただきました。爆心地には、ここが爆心地と示す10m以上もあるかと思える石柱が立てられています。その上方500mが原爆の爆発したところと言われています。

石柱の前に献花台が置かれており、カンタベリー大主教の献花が行なわれ、引き続き、九州教区が用意した式文によって原爆犠牲者の魂の平安を祈り、核兵器廃絶と世界平和を祈り、カンタベリー大主教のメッセージが読み上げられました。

「核兵器なしの世界を造り出すことは人類のモラルと尊厳のために働くことである。」「核兵器なき世界を求め続けなさい。どんな小さな行動でもそれは証しになります。」等と話されました。

爆心地での報道関係者の多さには驚きました。NHKでは数回放映され、朝日、毎日、読売、長崎新聞、西日本新聞には写真と共に記事が載せられました。

カトリック浦上司教座教会での合同礼拝は聖公会・カトリックの仲間達が一つとなって核兵器廃絶と世界平和を願う祈りの時でした。式文は高見大司教が用意してくださり、双方の信徒たち、修道者たち、聖職たちが祈りを通じて主にあって一つを現わす時でした。

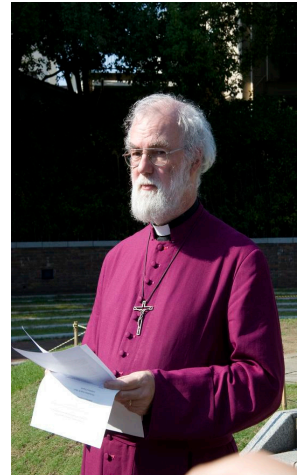
翌日25日は日本聖公会発祥の地に立つ時で

(前頁より)

- 11月24日(火) NCC国際わかちあい委員会
- 11月26日(木) NCC負担金検討委員会
- 11月29日(日) シンガポール教区100周年記念礼拝〔首座主教出席〕
- 12月3日(木) 聖公会生野センター理事會
- 12月11日(金) 日本キリスト教連合會常任委員会

した。日本聖公会最初の神学校が出島の中に建てられ、当時の神学校建物が復元された中に入りました。その後、聖公会最初の建物(1862年:文久2年建設)である英国聖公会礼拝堂跡地を訪ねてから長崎聖三一教会で待つ100人程の人たちと祈りました。

マタイの福音書28章の言葉「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。」が読まれて後、



日本聖公会宣教150周年記念主教会教書が読まれ、植松首座主教が150周年特祷を英語で祈り、引き続きカンタベリー大主教が原爆犠牲者の魂の平安と核廃絶と世界平和を祈り、祝祷してくださいました。

祈りの後の交流会では、5人の質問者に対してカンタベリー大主教は丁寧に、親しみを込めて、分かり易く応えてくださいました。聖公会誓約は分裂をもたらすのではな



いかとの危惧に対して、一致を保つためのガイドラインの様なものと応えられました。

ティー・タイムには同大主教が幼子を腕に抱いて祝福し、抗がん剤治療で抜けた髪の毛を帽子で被う女性に癒しの祈りをし、話しかけてくる人々と気さくに話す姿は良き牧会者の姿でした。

カンタベリー大主教と共に核兵器廃絶と世界

平和を祈り、150周年感謝の祈りをするを通じて、世界の聖公会の仲間と信仰生活を共に生き、主イエスの働きを担っている実感と力が与えられ時でした。

“霊”に包まれた2日間でした。主に感謝!



□常議員会

第57総会后第7回 10月14日(水)

主な決議事項

1. 書面による審議結果確認の件
議題:「OA資金引当金」取り崩しの件
印刷機購入のためOA資金引当金より3,500,000円を取り崩すことを承認すること。
2. 平和宣教教育活動資金(仮称)を創設する件
創設構想を承認。ただし、主事会議において資金・使用範囲等の詳細をつめて、総会提出議案とするよう助言。

〔提案理由〕

宣教150年を迎え、日本聖公会のこれからという中に、殊に中学生・高校生の年代に平和構築の学びの機会を提供し、それらのプログラムへの参加を促し、そのための参加の実現のために、新たな資金を管区に創設したい。

これは、例えば、「沖縄週間」、「広島平和礼拝」、「長崎に立つ」などの平和プログラム、また、海外諸国の貧困の状況の体験などのプログラムに中高生を参加させ、よい体験と学びをしてもらい、平和を実現する者となってってもらいたいという願いから、そのための費用負担をするため。

3. 宣教150周年記念礼拝の信施奉献先の件
首座主教より以下の提案・説明を受けて、承認。
記念礼拝の信施奉献先は、「カンタベリー

大主教の「アングリカン・コミュニオン宣教基金」に捧げることがすでに決められている。しかし、同資金は比較的豊かであり、これに比して「カンタベリー大主教自由資金」(大主教の裁量で困難な状況下にある聖公会への支援等に用いられる)が不足しているとの大主教の示唆を受けて、奉献先を「カンタベリー大主教自由資金」に変更すること。

□主事会議

第57総会期第14回 10月5日(月)

主な協議事項

1. 災害緊急救援に関して
8月から10月までに続いて起きた以下の地震・津波、台風・洪水の被災に対して、「日本聖公会緊急災害援助資金」から取りあえず緊急の救援金を送り、聖公会内の諸教会に救援募金を呼びかける。募金の期日を11月末とする。
(1) 台湾の台風被害、(2) フィリピンの台風による水害、(3) 南太平洋サモア諸島の地震の地震と津波被害、(4) インドネシアスマトラ沖地震被害
2. WCCのエキュメニカル会議開催支援金に関して
WCCのエキュメニカル会議開催(2010年5月中旬の10日間、ジャマイカ キングストン)のための支援金要請を受けた。支援の必要があるかどうかの情報を得て決定

する。

3. 「社会事業の日」 信施奉獻先に関して
日本聖公会社会福祉連盟の推薦を受け
て、次のとおり決定した。

- (1) 聖ヨハネ学園保育所（大阪教区内）—
施設整備のため
- (2) オリンピア新設保育園（神戸教区内）—
施設整備のため
- (3) 特別養護老人ホーム松丘園（横浜教区
内）—施設整備のため
- (4) 日本盲人キリスト教伝道協議会一点字
プリンター購入のため

次回以降の会議

2009年11月18日（水）、12月14日（月）

□各教区

北関東

- ・ 聖職按手式 2009年12月12日（土）10時
半 浦和諸聖徒教会 執事按手：志願者
聖職候補生 ダビデ斎藤 徹

東京

- ・ 第109（定期）教区会 11月23日（月）9
時～17時 聖アンデレ主教座聖堂、聖アン
デレホール

横浜

- ・ 第69（定期）教区会 11月22日（日）18
時～23日（月）16時 横浜聖アンデレ主教
座聖堂

中部

- ・ 10月12日（月）第80（臨時）教区会 - 教

区主教選挙 4人の候補者が推薦され、25
回の投票が行われた結果、司祭ベテロ洪澤
一郎師が選出された。

洪澤司祭は、11月5日付、主教就任を受諾
され、主教被選者となった。

京都

- ・ 第104（定期）教区会 11月23日（月）9
時～17時 京都教区主教座聖堂、教区セ
ンター会議室

九州

- ・ 第101（定期）教区会 11月22日（日）18
時～23日（月）15時 九州教区主教座聖
堂および教区センター

沖縄

- ・ 第51（定期）教区会 11月22日（日）16時
～23日（月）15時 沖縄教区センター ベッ
テルハイムホール



† 逝去者 霊魂のパラダイスにおける光明と平安
を祈ります。

Revd. Hio, William Arthur (司祭、米国聖公
会元宣教師、1953.08～1965.11 沖縄)
2009年10月16日（金）逝去（81歳）

クララ横田富志子（沖縄教区、元伝道師）
2009年11月10日（火）逝去（85歳）

📖 出版物案内

- ・ 『2010年度 教会暦・日課表』
2009年10月1日発行 価300円（税込）

《人 事》

東京

聖職候補生 ヨハネ塚田重太郎 2009年9月30日付 聖アンデレ教会勤務解任
2009年10月1日付 聖パウロ教会勤務命令

九州

司祭 バルナバ牛島幹夫 2009年9月1日付 九州教区主教座聖堂付の任を解き、司祭
フランス堀尾憲孝管理のもと、厳原聖ヨ
ハネ教会副牧師に任命する。

司祭 フランシス堀尾憲孝 2009年9月1日付 巖原聖ヨハネ教会牧師の任を解き、同教会管理牧師に任命する。

司祭 ビンセント原 寛 2009年9月1日付 巖原聖ヨハネ教会協働司祭委嘱の任を解く。

《教会・施設》

浦和諸聖徒教会ならびに広田主教(北関東) FAX 番号変更 (新) 048-762-6318

連載特集

日本聖公会宣教150周年記念礼拝②

-150周年の「よろこび」を記す-

NSKK 宣教150周年に参加して

北海道教区 司祭 藤井 八郎

9月22日夕の礼拝の米国ジェファーツ・ショール総裁主教の説教、同日レセプション来賓の挨拶に、150年を迎えた日本聖公会の意義と進むべき道が表されていたのではなかろうか。大韓聖公会首座主教ユン・ジョンモ師父は、現代日本の流れを深く理解した上で、日本聖公会が宣教の同伴者として未来に邁進することを望んだ。立正佼成会会長庭野師は歴代カンタベリー大主教との交誼を省み、世界の平安のため共に働けることを感謝し、出会いの中での印象深かった言葉を引用して宗教本来の働き、原点を見据え、人々の魂の救済のためにこそ我々の存在意義を確認せよと語った。

カトリック大司教岡田師父は、生き方こそ違え、仲良く一緒に主を仰ぎ、キリスト者は素晴らしいと世の人々に認めさせ、平和のために他宗教からも学びつつ、日本と世界のため、この世で疲れ切っている人々のために共に働きたいと述べられた。

過去の偉大な宣教者達に心からの尊敬の念を捧げるのはもとより、これからの日本聖公会の宣教の歩みを示唆し、期待するメッセージに、我々一人ひとりが応え生きる時、始めてこの集まりの一つ一つの意義が明確にされていくのだと思う。それ故、歴史的展示物、全教区的な力の結集には充分であったらうかと考えら

れる青年たちの活動、そして特に目を引く各々のプロジェクトの展示も、日本聖公会の現在の在り方を示す結晶としてアピールされていたのではないかと考える。あらためて、企画担当に当たられたお一人お一人に心からの感謝と御礼を申し述べたい。(函館聖ヨハネ教会牧師)

記念礼拝とその前後のことなど

東北教区 司祭 ヤコブ 八戸 功

記念礼拝の当日、目白駅のバス乗り場に向かった。長い行列が出来ていた。時間がかかりそうだ。青森駅を出て特急、そして新幹線と乗り継いで東京まで来た。移動中に東北教区の教区主教を務められ、横浜教区の藤沢で過ごされていた田崎安男師父の逝去の報が入った。魂の平安を祈った。バスに乗りカトリック教会マリア大聖堂に着いた。多くの人が大聖堂付近にいた。プロセッションのために礼拝堂前の広場に赤いストールをなびかせた聖職たちが集まってきた。定刻となり聖餐式が始まった。カンタベリー大主教の説教があったが、私は祭壇の後ろの席にいたせいか殆んど内容は聞き取ることが出来なかった。しかし、管区事務所便りに全文を掲載していただき内容を知ることが出来た。「裸足の宣教」という心に染み入る深い内容だった。分餐が始まり長い分餐の列が礼拝堂祭壇の前に何本も出来た。三千人近くの参加

者と聞いている。聖皿の当番が当たっていたので祭壇の前に進み出た。とても長く感じた。終わりほっとした。150年前に命がけで来た宣教師たちや初期に洗礼を受け信徒となり、さきかけとなった人々へ感謝の気持ちを捧げた。

礼拝終了後、夕方に捧げられる東北教区第四代教区主教コルネリオ田崎安男師父の「通夜の祈り」に出席のため、横浜聖アンデレ教会へ向かった。(青森聖アンデレ教会牧師)

軽やかに歩む伝道

北関東教区 パウロ 横川 浩

9月23日の記念礼拝の感動を今もう一度かみしめています。12時半ごろの開場と聞いておりましたので、時間を見計らって、私と家内が会場の MARIA 大聖堂に到着したのは、12時20分ごろでした。すでに聖堂はいっぱいとのことで、聖堂隣りの関口会館地下の会場へ案内されました。

大型のスクリーンと聖餐式の中継映像音声により、司式者の植松首座主教様、説教者のローワン・ウィリアムズ大主教様の姿も、その張りのある声も、はっきり聞こえました。後で、同じ水

戸から早く到着し聖堂内にて参加された人達から、説教者の声が響いてしまい、よく聞こえなかったと聞きました。

神様は、いつも私たちに、よいものを備え、与えてくださいます。時間に遅れて落胆する人には、さらに良い場所を与えてくださったのだと、勝手に解釈しておりました。

その神様の与えてくださる良き物、良き機会にいつでも従うには、いつも持物を少なくし、身軽な装いで、日々の生活を送ることだと、お説教の中で教えられました。世の常識にとらわれず、自分の考えで行動し、神と人ともに奉仕する生き方をもう一度取り戻したいと思いました。質素と謙虚な生き方を考える機会を与えられました。(水戸聖ステパノ教会信徒)

たくさんお恵みをいただいた日

東京教区 マルチン 足立 征三郎

「宣教150周年記念礼拝実行委員会」に2008年10月8日からその準備に加わり、「記念礼拝」を皆様と一緒に捧げることが出来、感謝の気持ちで一杯でした。

シンポジウム終えて出会える
韓国の主教差し延ぶ 温かきみ手

米総裁主教

諄々じゅんじゅんと宣教の意を説く女は
総裁主教なる重荷負い

控えめに女性主教は黙し佇ち
語ればややにユーモアこぼる

ローワン大主教

身に纏うものを除きて軽やかに
深みに行けと 大主教説く
深みには痛み・危さあまた数多あらん
されど主とも偕まに痛み在すなり

感謝

宣教の百五十年経し今に
我在る不思議 主を讃めまつる

(沼津聖ヨハネ教会信徒)

当日は、会場担当の一人として、東京教区・横浜教区から事前登録を頂いたボランティアの方々、当日急遽参加くださいました170名を超える人々によって、設営準備・受付・案内・介助・救護・アッシャー・こども係・手話通訳・ノートテイク・オルターギルド・後片付け・音響・記録撮影など、多くの方々と一緒に「宣教150周年記念礼拝」に関わることが出来ました。

前日まで、会場に入れない人は…、雨が降ったら…、事故が起きたら…、と「たられば」が付きまತ್ತたのですが、記念礼拝に集まった3000人近い人々のご協力を得、素晴らしい「宣教150周年記念礼拝」を捧げることが出来ました。お恵みを授けてくださいました神様、そして皆様に、本当に感謝いたします。会場内では、些細な行き違いはありましたが、事故やけが人もなく、天候にも恵まれ、充実した一日でした。

♪「おおなみのように 神の愛が …」
たくさんのお恵み、ありがとうございました。
主に感謝。 (東京教区宣教主事)

軽装の宣教…150周年を迎えて

中部教区 司祭 ペテロ 渋澤 一郎
去る9月23日(水)、日本聖公会宣教150周

年記念礼拝がカトリック・聖マリア大聖堂で行われました。約3000人ほどの参加者とのことで礼拝堂は立錐の余地もないという状況でした。わたしはパテンを持たせていただきましたが、いつまで経っても陪餐の列が絶えないのには感激しました。どなたかではありませんが、日本聖公会にはこんなにたくさんの人がいたんだという思いでした。(ほんとうはもっとたくさんいるのです。)

ローワン・ウイリアムズ カンタベリー大主教の説教も印象的でした。「軽やかな宣教」という表現は大変興味深いと思いました。日本聖公会は、教会の歴史から見たらわずか150年にもかかわらず、組織的には随分重装備になっているような気がします。もっと自由に、大胆に宣教に向かわなくてはならないという思いを強くしました。イエス様は「旅には杖1本のほかに何も持たず…」と言って弟子を宣教に派遣されました。まさに軽装の宣教です。

150年前のウイリアムズ大主教も軽やかな宣教だったと思うのです。頼るものはただ神のみ、そして、日本に福音を伝えるという思いだけがそこにありました。150年に当たり、わたしたちはその思いにこそ心を向ける時なのではないでしょうか。

宣教百五十周年 讃めうた

オモニ合唱

横浜教区 リベカ菊田米子

主の業の尊きを讃め オモニらの
うたう聖歌は みうた チャペルに満つる

オモニらの清しき すが 聖歌 みうた

我が裡に響き 歴史の過ちを悔ゆ

アリランは悲しき歌よ そを越えて

優しさ溢る オモニらの歌

シンポジウム

韓国とフィリピン・日本それぞれに
主教 アジアの平和訴う

穏やかに正義と平和説きながら

深みへと漕ぐ厳しさを問う

貧しさを訴うるフィリピンの声

富の傲りは胸に突き来る

戦争の無いことのみが平和かと

問いて求むる永遠 との平和を

宣教 150 周年記念礼拝

京都教区 フランシス 三木 清樹

宣教150周年記念礼拝に列席させていただく機会を与えていただき感謝いたします。

私は4月に、九州教区150周年にも列席させていただき光栄を得させていただきました。9月23日カテドラルで考えていたことは、これらのことは、決して別々のことではなく、神様の業のなかの一つだということです。

そうした思いから150年の日本聖公会の歩みを考えると、私たちの様々な生き方があり、それが響き合いながら時間を歩んできたということです。事実、記念礼拝の前日には立教大学校内でいろんな各地団体のアピールがあり、交流がなされていました。教室やホールを使ったシンポジウムなどでは、現状を考え未来への提言が語られていました。23日の記念礼拝には、主張の異なる聖職者たちもひとつの聖卓を囲んでいました。

今、私たちは、150年というメモリアルから次の時間を歩みだしています。150年を振り返り、祝う思いと行いから、どんな世界が生まれていくのか、日本聖公会がこの国や社会にメッセージを伝えていくヒントがたくさんあった思いがしています。記念礼拝の退堂聖歌となった「大波のように」が、こどもたちの合唱から全会衆の合唱に広がっていたように、私たちが見聞きしたことを伝えていくことが求められています。

日本聖公会 150 周年

大阪教区 司祭 ウイリアムス竹内 信義

ローワン・ウィリアムズ大主教は、初代の英国人宣教師E・ピカステス主教がその働きを始めた時、和風の家を靴を脱いで上った例を取り上げ、モーセが燃える柴の前で履物を脱いだことと合わせ、宣教師が立ち入る地は、何処も聖

地であり、神が既に働いておられる場として、重装備でなく神に信頼し軽装であるべきである、それは傷つくことも覚悟すべきと強調された。日本聖公会の現状をよくご存じのように思う。

明治に蒔かれた種は大きく成長した。しかし、戦前・戦中の大試練に未熟さが暴かれ、その過ちを告白し、私たちは新たに歩み出した筈である。1996年の「戦争責任に関する宣言」など、何処まで全信徒のレベルに浸透しているのか、との谷昌二主教の危惧は当を得ている。実際、北朝鮮への「練炭支援キャンペーン」など知らされていなかった例もある。

私たちが「沖へ漕ぎ出す」のは何処に向ってなのか、視線を向けるべきは何なのか、今は我が国の教勢不振を嘆いている場合ではないだろう。30年前のこと、シドニーのCMS本部を訪れたとき、日本人の私に「我々は70名の宣教師を世界に派遣している。あなたの国も、一人でも派遣して欲しい」と言われた。返す言葉が無かったことを思い出す。

宣教 150 周年にあたり

神戸教区 東 弘彦

日本聖公会宣教150周年の記念礼拝に参加しました。信徒の減少・高齢化が進む中で、礼拝堂は参列者で溢れかえり、大変な盛況でした。

また、若い頃を過ごした東京教区の母教会の方々を始め、旧知の人と顔を合わせる機会があり、懐かしい思いをしました。

私は学生時代に東京で教会に導かれ、聖公会の群れに加えられました。その後、何度か生活の地を変えましたが、どこにあって教会で温かく迎えられました。

聖公会は信徒をととても大切にします。そして、教会に属する人が育ち、交わりを深めて行けるように有形・無形のシステムができています。

翻って、信徒になる前の人にはどうでしょう

か。救いがあるいは真理を求めて、今日初めて教会の門を叩こうとする人は多くいると思います。確かにわれわれは求道者を大切に扱おうとします。しかし、その人たちに対して、その人たちの視線で向き合っているのでしょうか。このことが、教会の課題として今与えられているのではないかと思うのです。

宣教師達が日本で働きを始めてから150年が経ちました。私たちはそのおかげで、今自分が神さまの救いの恵みのうちにあること、を思い起こすことが、課題解決の第一歩ではないかと思えます。(神戸聖ヨハネ教会信徒)

宣教 150 周年記念礼拝に出席して

九州教区 ヨセフ秋山 献之

その日は素晴らしい秋の一日であった。ローワン・ウィリアムズ カンタベリー大主教様をお迎えして、2700名にも及ぶ聖職、信徒とゲストを交えて、カトリック東京カテドラルで行われた日本聖公会宣教150周年記念礼拝に出席出来たのは豊かなお恵みだった。

大主教様の説教は心に響くもので、これからの信仰生活に多くの勇氣と希望を頂くものだった。また、奏楽と聖歌隊の素晴らしい演奏と歌声が心に残った。個人的には、BSAの仲間を代表して、代祷のご奉仕をさせて頂いたことは、深く心に刻まれる出来事であった。また、横浜、市川に住む息子たち家族もこの礼拝に出席し、3人の小さな孫たちが大主教様から祝福を受けたのは、この上ない喜びだった。

これまでの150年の歴史の中に、多くの先達の働きがあり、名も無き信徒の思いが引き継がれて来たこと、特に、その週末に逝去記念日を迎える父のことを深く想った。私も受按50周年を迎えたこの機に、神様のお恵みにより、与えられた賜物を生かし、一層宣教に励みたいと思う。(福岡聖パウロ教会信徒)

一期一会の兄弟姉妹たち

沖縄教区 司祭 上原榮正

主に向かって喜び歌おう。救いの岩に向かって喜びの叫びをあげよう。(詩篇 95:1)

沖縄教区から日本聖公会宣教150周年の記念礼拝に54人の聖職・信徒が参加しました。

記念礼拝には、祭壇上に聖職者が約250名、全体では2850名余の出席があったとお聞きし驚きました。礼拝で強く感じたことは、人が大勢集まると力が湧いてくるという思いでした。段々と高齢化し、少ない人数での礼拝をしておりますと、寂しさを感じる時もあります。でも記念礼拝では、同じ聖公会の仲間と一緒に礼拝しているというだけで何かが熱くなる思いが致しました。

私は大聖堂の真ん中の通路で陪餐のお手伝いをさせて頂きましたが、ほぼ全員が初めての兄弟姉妹ばかりでした。その時浮かんだのが一期一会の言葉です。毎主日の聖餐式も1度限りの聖餐ですが、主と共にあって、次週までお元気だという思いを込めてしております。でも宣教200周年まではちょっと遠いです。一期一会、おひとりお一人との出会いを楽しみながら陪餐をさせて頂きました。大きなお恵みでした。

裏方の皆さんのご苦勞は大変だったと思いますが、10年か20年に1度、このような大礼拝が持たれるならば、日本聖公会全体の力になるのではないかと思います。

「錨」

管区常議員 倉石 昇

この度の日本聖公会宣教150年には、公務でご多忙の中、カンタベリー大主教ローワン・ウィリアムズ師、米国聖公会キャサリン・ジェファーツ・ショーリ総裁主教ほか海外から40名の代表の方々、さらに「平和を共に願う」他教

派、他宗派の方々をお招きし、皆様から激励とこれからの示唆を頂き感謝でありました。いろいろな部門で11教区の主教方はじめ聖職たちの笑顔でのお働きを記念プログラム行事に於いても拝見し、大変印象的でありました。主教教書・特祷をこれからも私たちの心に刻みたい。

22日の夕の礼拝(於立教タッカーホール1,400名)も23日の大礼拝(陪餐者2,850名)にても力強く、ラの音は癒しの音と聞いているが、あの爽やかな明るいハーモニーが癒しから躍動感へと感じられたのは私ひとりではあるまい。好天にも恵まれ、予想をはるかに越えた集いは全て順調であったこと、多数のボランティアを含む関係者各位に心から感謝する次第です。

さて、現在日本聖公会では、聖職教役者の不足が最も深刻な問題で、ぜひ皆様のご加禱を願いたい。教区再編成・年金問題など難題多くあるが、過ぎし150年間にあっても同様であった。先ず互いに理解し合い、心の閉鎖を取り払うのが先決であろう。航海には穏やかな時もあり大波も台風も五里霧中もある、船には錨が大切。ヘブル書6:19に「私たちが持っている希望は、魂にとって頼りになる、安定した錨のようなものである」のみ言葉に注目しよう。希望は信仰と愛と共に聖霊の賜物である。「漕ぎ出せ沖へ」(ルカ5:4) 全聖公会に意気込みを表した私たちは希望を持って雄々しく前進しよう。

主に感謝

管区事務所では11月末を期日として、フィリピン、サモア、スマトラ、台湾の台風、地震被災救援募金を行っています。ご協力をお願いします。

フィリピンにおける台風被災者の現状

報告者：司祭 神崎雄二(東京教区聖救主教会牧師)

訪問：2009年10月12～15日

はじめに

2009年9月26日、台風16号(現地名オンドイ)がフィリピンのルソン島中南部を直撃した。またそれに引き続き、10月3～10日、(台風17号現地名ペベン)が、ルソン島北部を直撃、その速度はきわめて遅く、ルソン島北部に「滞在」したと言ってよい。この二つの台風によって、甚大な被害が発生した。

日本聖公会管区事務所から20万円の献金をお預かりしたので、他の諸献金も共に持参し、これらを届けるため、短期間ではあるがマニラの被災地を訪問した。そこで見聞きした事を、ここに報告したい。(写真上は、9月26日のマニラの洪水の状況)



1) 被害の全体状況
まずこの二つの台風の被害状況を概観したい。

台風16号オンドイによる被害は、10月13日 National Disaster Coordinating Councilの発

表によれば、88万世帯430人が被災、死者は308人に上る。しかしこの数には、深刻な被害のあったマルキーナ市とリサル州の数がカウントされていないので、その両地区の被害の実態が判明すれば、被害者の数はさらに増えることは確実である。

台風17号ペベンは、ベンゲット州バギオを中心に、一週間にもわたり山岳地帯一体に大雨を降らせた。これにより、87万世帯416万人が被災、死者は438人(同上NDCC発表)、そのほとんどが大雨による地すべりによる生き埋めの死である。死者の数や行方不明の数は、まだまだ調査が行き届いていない状況の中では定かではないというしかない。

2) ケソン市タタロン近辺の被害

マニラ(ケソン市)では、フィリピン聖公会の大聖堂、聖アンデレ神学院、聖ルカ病院、トゥリニティー大学・小学・ハイスクール、その他聖公会関連施設が集中する「大聖堂ハイツ」の一角にあるゲストハウスに宿泊した。

そのうっそうとした木立に包まれた高台の周りを縫うように、川が流れており、その川の対岸にブロードウェー、タタロン、ダマヤンラギといったスラム街が広がっている。その川が台風で見る間に増水し、濁流となり、これらのスラム街を直撃したのである。



命は助かったものの、泥まみれの家財道具の中で...

スラムの家々は、細い木とベニヤ板とトタンで作られており、豪雨による濁流は、スラム住民の家々を一飲みにした。洪水は2階の高さにまで及び、衣類も食料も一切を泥水に浸した。トイレの下水も機能しているのはごくごく一部であり、ほとんどの家ではそれは垂れ流しであった。汚水は数日とどまり、その汚水の中に住民は排泄もした。



マサンボン地区を訪問するディクシー・タクロバオ主教と筆者

フィリピン聖公会中央教区の関係者は、高台の大聖堂ハイツに逃れてきた近隣住民に教会諸施設を開放し、炊き出しを行った。学校関係者も米や缶詰、インスタントラーメンなどを持ち寄り、被災者を支えた。やがて被災者達は泥水だらけの家々に帰ったが、炊き出しはなおも続き、ランチボックスをスラムに於いて配った。米を届けても煮炊きすら出来ない状態が続いたからである。衣類や医薬品の配布も開始している。

その後、近隣の地域のみならず、信徒や学校関係者がいる町々(マルキーナ、カインタ、マサンボン等)に出て行き、米、缶詰、衣類、学用品等の入ったバックを配布しているが、その配布には困難が伴っていた。数に限りのある救援物資を無邪気に配布すると、大勢の人が群がり、大混乱となり、怪我人すら出かねない。そこで教会関係者が地域住民の世話役と協議し、最も貧しく、救援が望まれる家族を選び出し、その人たちに引換券を渡し、翌日配布するという。

フィリピン聖公会の教会は、ルソン島北部の山岳地帯に多くあるので、今後その地域に救援活動をシフトするという。

3) フィリピンNCCの働き

フィリピンNCCの救援活動は、上述したフィリピン聖公会の働きを、もっと広範に、かつプロフェッショナルに行っているといっている。災害が起って直ちに「NCC青年委員会」のメンバーが集い、広範なエキュメニカル青年のボランティア集団が集結した。そして援助金で多量の米・缶詰・干魚、塩、乾麺、モンゴース豆、油を買い、それをパック詰めにし、地方NCCの協力の下に、大々的に配布し始めた。また浴用石鹸、洗濯石鹸、タオル、歯ブラシ、歯磨きのセットも配布、さらに古着の収集・配布も行っている。その活動は、迅速かつ効果的で、こうしたボランティア活動に熟達している集団の働き、という印象を強く受けた。

NCCでは米5kg、缶詰、豆、塩、油、乾麺をパックにし、配布



「問題は、」と救援担当のベニー女史は言う。「問題は、インドネシアの地震やサモアの地震が重なった事により、国際的な救援の反応が鈍く、今や救援物資が底をついてしまっている状況だということです。」「最も迅速に献金を送ってくださったのは、韓国の福音系団体Korean Center Diakonia Serviceであり、いわゆるNCC関連の諸外国教会からは、まだほとんど届いていません」ということであった。

こうした緊急災害にあっては、直ちに現金が必要な事を、もっと私たちは認識しなければならないと思う。ある程度資金を蓄え、それを直

ちに送金し、献金は後から集めるというやり方を、もっとしっかりと行うべきである。

4) フィリピン聖公会の救援活動に参加するために

上述したフィリピンNCCと比較し、フィリピン聖公会はこうした救援活動を効果的に行うことには慣れていないが、しかしその被害の多くの部分が、ルソン島の山岳地帯である故に、一層の協力を近隣の各国聖公会諸教会は行うべきである。

すでにフィリピン聖公会北教区の主教からフィリピン聖公会管区事務所に送られている情報によれば、17号の台風による豪雨のために、山岳地の道路はずたずたにされ、地滑りが各所で起こり、被害が続出しているという。すなわちタジャンの北カヤン村では16の家が土砂に埋まり35人が死亡、同じくタジャンのスマデル村では4人が死亡、ルボンでは、一つの家が土砂に押し流され、またピサオのブンガ村では一軒の家が押し流されて3人が死亡、その他の山間の村々での被害の実態はまだ明らかでないし、ベンゲット州の州都バギオですら、一体どれほどの死者が出たか、まだ不明、といった状況である。

またルソン島の北東に位置するサンチャゴ教区は穀倉地帯であるが、収穫間際の稲が水没し、収穫不可能となった地域が広がっている。これは来年の米の価格の高騰に繋がるであろうとのことであった。

結び) 長期的な援助の必要性

17号台風ペペンの被害は、土地・家屋の流失や田畑の流失を伴っているが故に、救援対策は一過性のものにとどまることなく、長期的な視野にたって行われるべきである。とりあえずは、米や衣類の供与や医療的な援助を行いながら、長期的には家屋の再建、教育支援、農業支援を行うべきであろう。フィリピン聖公会の援助活動に寄り添いたい。